

2014年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 国際学部・教授・于 康

研究課題：中国語母語話者の日本語の誤用研究

研究期間：2014年4月1日～2015年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

中国語母語話者の日本語学習者を対象に日本語を教えたり、日本語母語話者の中国語学習者を対象に中国語を教えたり、誤用の研究を行ったりする立場に立つと、文や文章の添削や誤用の傾向性や規則性を見いだすためのデータ処理が必要になってくる。

添削とは、学習者が作った文や文章を直すということであり、レトリックよりも、文法表現の正確さを重視して行われる。データの処理とは、添削した言語データにより詳細な付加情報（タグ）を付与し、タグ付与のコーパスを作成した上で、研究の対象を絞ってキーワードで検索して集計することであり、それによって誤用の傾向性や規則性を見いだすのである。

文や文章の添削については、これまでは、またいまでもそうであるが、朱筆添削がほとんどであるように、手作業に頼らざるを得ない部分が多い。仮に Word の校閲機能を使って添削を行うとしても、添削したものは学習者に返却してしまうだけで、以後のデータの処理にはなかなか結びつかないのが現状であろう。

添削したものは、誤用のデータとして処理する場合、これまでの方法では、手作業によりパソコン上でその誤用のデータを入力しなければならない。タグを付与する場合は、手作業で1つずつ何らかの印を付けたり書き込みをしたりした上で、目視でその印や書き込まれた結果から誤用の傾向性や規則性を見いだすというのが主な手法であろう。

以上のことが原因であるためか、中国語母語話者の日本語学習者の日本語教育日本語や日本語母語話者の中国語学習者の中国語教育においては、添削が敬遠され、添削済みのデータも生かされないままになっているので、日本語の誤用研究や中国語の誤用研究はまだまだ低空飛行を抜けていないといえよう。出現した誤用例を単体で独立させて見た場合、つまり、収集された誤用例を集計し、出現数の多さを加味しない場合、それは必ずしも中国語母語話者の日本語学習者や日本語母語話者の中国語学習者の典型的な誤用とは言えなく、学習者の誤用の傾向性を表すものでもない可能性が高い。場合によっては、非典型例や少数の学習者にしか見られない周辺的な誤用例であるかもしれない。

そこで、この特別研究期間において、これまで開発してきた正誤タグ自動変化機能付きの日本語作文添削ソフト、タグ自動識別機能付きの日本語タグ付与ソフト、複雑検索や自動集計機能付きの日本語学習者コンコーダンサー、正誤タグ自動変化機能付きの中国語作文添削ソフト、タグ自動識別機能付きの中国語タグ付与ソフト、複雑検索や自動集計機能付きの中国語学習者コンコーダンサーについて、それぞれの機能を改善し、補強した上で、以下の内容を中心に日本語の誤用研究を進めてきた。

1. 大規模なタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コンコーダンサーの構築

中国の大学35校からご協力をもらい、学部的一年生から四年生まで、大学院一年生から三年生まで、卒論や修論を含めた作文のデータを集め、添削を行った上で、正誤タグ

や研究タグを付与した、自動集計機能付きのYUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コンコーダンスの構築を進めてきた。現在も構築中。

2. 著書、論文、学会発表という形で、研究成果を公表。

著書が3冊、論文が2本、学会発表が8本。

3. 講演や講習会という形で、研究成果を推進。

講演が18回、講習会が2回。

研究成果概要は、データは gakunai@kwansei.ac.jp まで提出してください。